



イギリス科ニュースレター No. 14 / April 2007

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (8号館402号室)
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
E-Mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp
Home Page: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp>



主任挨拶

安西信一

まずのご報告。3月にイギリス科研究室的の引越しが完了。当初研究室があった8号館の改装が終わり、避難のため間借りしていた9号館から再び約束の地、8号館へと戻った(ただし4階402室に移動)。この引越しに際しては、教務補佐の堀越庸一郎さんが奮闘してくれた。学者が先導し、安い請負業者が行う引越しなのだから、無限に続く瑣末な問題に翻弄され、さぞやご苦労が多かったろうと推察する(ちなみに私は、忙しさにまげほとんどタッチしていない)。またそれに伴い外国語の図書館(旧8号館図書館)も引っ越したが、これに際しては博士課程(当時)の藤田祐さんとアルヴィ(宮本)なほ子先生が尽力されたと聞く(つまり私はこれにもタッチしていない)。皆さんに心より感謝したい(いささか無責任な言い方だが、少なくとも感謝の気持ち自体は真摯である)。

お陰で8号館とイギリス科研究室は、依然手狭とはいえ、実に美しく快適な空間となった。かくして研究室の流浪、ないし栄光への脱出は終わり、毎年のルーチンワークが始まった。主任にとって春のルーチンは、4年生全員と面接し卒論の指導教員を割り振ることである。卒論指導はイギリス科教員最大の仕事の一つだし、自画自賛ながら、充実した指導体制になっているとも信ずる。しかし私はどうも、こうした指導に心理的抵抗を感じてしまう。

勿論その原因としては、真っ

先に私の非力、怠惰、或いは人間嫌いを挙げるべきだろう。また時代的・世代的なものも大きい。私は学生時代、論文指導、特に卒論指導を受けた経験がほとんど全くない。これは必ずしも私や私の同業者の特殊事情ではなく、昔はそういう放任主義が当然だった。清水幾太郎『論文の書き方』、渡辺昇一『知的生活の方法』などを嚆矢とするマニュアル本のインパクトが大学教育の現場に達するまで、その種の「知の技法」は、親方先生の背中を見て盗む職人芸だった。そうした環境で育った者には、何でも丁寧にケアすることを無上の枢要徳とし、その種の思い遣りを欠くあり方をハラスメントとして指弾する昨今の風潮はどうしても馴染めない。……と、何だか自分の学生指導が杜撰なことの言い訳になってきてしまったが、ただ、私の心理的抵抗にもそれなりの根拠、この際、イギリス的とすら言えそうな根拠があるのではないかと開き直りたくもなる。

例えば、近代日本がイギリス思想から受け継いだ最良の部分に属するミルの『自由論』。そこでは、他人の精神的自由、思想の自由を奪ってはならないことが強調される。人間は可謬的存在だから、自由な公論の発露を圧殺してはならない。どれほど異質な意見であっても、他人の意見はあくまで尊重すべきだと。そこからすれば、可謬性の権化のような私が学生の思考を曲げることは、ほとんど犯罪的ではないか。

確かに、厳密に考えれば、どこまでが他人の精神で、ど

こからが自分の思想なのかは、はっきりしなくなる。むしろ学生と教師は、共通の実践的マトリックスの中で、妥当な共通理解の地点を目指してゲームを行っていると言うべきだろう。とすれば私もまた、そのゲームの一駒を演ずるべきではないか。そもそもたかが1年間の卒論指導程度で、学生の精神的自由を奪い取るなどと考える方が、よほど教師の傲慢だろう。第一、最近の学生や一般に社会は、そのような「洗脳」を易々と受けるほど、ナイーブでもなければ大学の権威を信用してもいない。

他方ミル自身、未発達の世界や人間には、強権的に真理を強制することも許されると言っている。まさに学生の場合にはこれに当たると考えることもできるだろう。だが、やはりそういうミルの物言いが、インドその他の植民地に対するイギリスの帝国主義的支配の正当化に用いられたということ想起すれば、再び暗澹たる気持ちになってしまう。いやしくもポスト植民地主義などということ口にする人間が、学生の精神を植民地化するというのか。

最近の学生は叱られたことが少ない、だからちゃんと叱るべきだという意見も耳に入ってくる。してみれば私の心理的抵抗は、今の親たちが感じている躊躇や逡巡とも似ているのだろう。私は叱るのは下手だし、嫌いだし、そして卒論指導は、そういうしつけとは異質のものだとも思いたい。だが、本当にそんな風に逃げていてよいのか。大学教師とは、一体どういう存在である

べきなのか。今年も、卒論の中間発表会が近づいてくる。憂鬱だ。

新任のご挨拶

佐藤光

はじめまして。さとうひかりです。2007年4月1日付で比較文学比較文化研究室に着任しました。専門はイギリス・ロマン派文学。ウィリアム・ブレイクの研究が表の看板ですが、裏返すと柳宗悦と白樺派がもう一つの関心事です。看板の下塗りあたりでは、イギリス児童文学、とくにアーサー・ランサムに興味があります。

生まれも育ちも大阪で、東京にも東京大学にも縁もゆかりもない人生を過ごして参りました、と申し上げると誇張になるかもしれません。大学院に進学する際に、京大と東大のどちらに進むべきかと迷い、千駄木に四畳半一間の下宿まで見つけておきながら、結局京の都にとどまる選択をしたのは、異郷へ出て行くだけの度胸がなかったからでしょう。今は度胸があるのかと問われますと、それはそれで心許なく、18号館の研究室から緑の山が見えないことに不安を感じ、その不安を西で暮らす友人に書き送っては、おまえはハイジか、と揶揄されながら毎日を過ごしています。

そもそもなぜ駒場に来てしまったのか。比較文学に研究の新しい可能性を夢見てしまったから。ブレイクを読んでいるときでも、どこかで日本を意識している和物好きの英語読み。高校生の頃に、大阪は日本橋の国立文楽劇場へ『国姓爺合戦』を見に父親に連れて行かれ、開演後いびきをかき始めた父親を尻目に、息子のほうは人形浄瑠璃の世界にはまってしまいました。学割チケットを買っては文楽劇場に通いつめ、時代物と世話物にどっぷりと浸って過ごした

高校の3年間。

大学では国文学へ行って近松の研究をするはずだったのに、国文のガイダンスが「暗く」、第二希望でのぞいた英文が「明るかった」ので、英文に進んでしまいました。

卒論をブレイクで書き始めた1990年に、国立西洋美術館でウィリアム・ブレイク展が大々的に開催され、夜行バスでふらふらになりながら上野にたどり着いた私は、寝不足で疲れ切った頭のままブレイクの絵を見てブレイクに取り憑かれ、民芸館では柳の仕事に圧倒されました。神田の古本屋で柳宗悦全集を見つけて貯金をはたいて購入し、月末までの1週間をメロンパンでしのいだことは、当時の青い思い出です。

大学院進学後も和物好きの思いはやまず、ひょんなことから茂山千三郎師のもとに弟子入りをして大蔵流狂言を習い、留学先のロンドンのロータリー・クラブの年次総会で小舞を披露し、帰国後は京都の祇園コーナーで狂言のアルバイトをしていました。

最初の勤務先は東北学院大学。遅まきながら車の免許を取り、東北各地を走り回って、来年は十和田湖に行くぞ、と決めたその年に神戸大学へ転任しました。神戸では、校務に疲れると六甲の山を登り、

西宮ヨットハーバーで海を眺め、来年は小型船舶の免許を取ろうと思い立ったはずなのに、豈図らんや東京へ出て来てしまいました。

京都で下宿を始めてから1箇所に4年以上住んだことがなく、神戸で6年を過ごしたとはいえ、途中で在外研究でロンドンに出ていますので、仙台に4年、神戸で2年半、ロンドンに1年、神戸に2年半、という間隔で住まいを転々としています。この周期でいきますと、4年後までにはどこぞへ向けて長距離引越をするはずですが、はたしてどうなりますやら。

と、ここまで書いてきて、これがイギリス科のニュース・レターであることを思い出しました。比較に着任したはずなのに、なぜ、イギリス科で自己紹介文を書いているのか。よくわからないまま筆を措きます。

(来し方を振り返りますと、寛大な先生方が、折に触れ、あたたかい御手を差し伸べてくださいました。心から感謝します。)

イギリス科研究室が 新しくなりました

新研究室は駒場8号館402です。11月のHomecoming Dayの折など、ぜひお運びください。

(写真は新研究室で談笑する若者たち)

